


trust

dm edition

For Adult Only

mechi

彼を想う時、胸を焦がす炎の正体は、「愛」という神に等しい言葉にも到底取まりきらない。

僕の道標であり、救いであり、光である、この世でたったひとりのかけがえないあの人に、いつまでも僕は、恋をしている。

■ 0. 僕

故郷のスコットランドを離れてロンドンの大学に進学した僕に、俗に言う「将来の夢」なんてのはなかった。専攻は教育学部で、留年しない程度に単位を取っていた学生生活のほとんどは、家庭教師とモデルのバイトと、彼女とのデート（概ね彼女のフラットでセックスするだけだったが、バンドを優先していたから長続きはしなかった）と、学内で知り合ったロック好きの連中と組んだ遊び半分バンド練習と、気が向いた時にやるライブと、ライブハウス通いやクラブでの夜遊び

が主だった。

音楽に目覚めたのは3つ年上の兄さんの影響で、14、5歳の頃にはのめり込んで、そんなヤツなら誰でも通る道らしく、学校でモップをマイクスタンド代わりに歌ったり、学園祭にバンドで出たりした。

地声の割に高いキーが出せた僕は、DEEP PURPLEをカバーしたいギターのヤツに頼み込まれる形でヴォーカルになって以来、ヴォーカルしか担当したことがない。思えば、シンガーが宿命だったんだろう。

大学で組んだバンドでは、そこらの連中より抜き出したヴォーカリストとして多少は名を知られていた。歌って食ってけりやいいというぬるい考えしかなかった僕は、前述の通り遊んでばかりで、教育実習は「長い髪を切れ」と言われて初日でやめたし、就活もしなかったし、卒業式の日にはライダースとジーンズで行って、式には出ずに連れと遊びに出かけた。

とりあえず、シックス・フォーム（大学進学過程）までの数学教師の資格は取ったものの、教職に就く気が